



たつき  
平松 辰規さん

幼い頃、一度だけ祖母から戦争の話聞いた覚えがありますが、当時の私にとってショックだったことしか覚えていません。子どもの頃は、顔も知らない曾祖父のことをどこか他人事のように思っていました。小学生になった娘を持つ今、祖母の話の聞くと「自分と同じくらいの年齢で子どもを残し、どんな思いで亡くなったんだろう」と、考えさせられました。娘が平和に暮らせる未来を守るため、祖母から聞いた話を受け継いでいきたいです。



## 平和のバトンを 未来へ

平和は決して、当たり前のものではありません。

人類の歴史は戦争の歴史と言われるほど、争いが絶えず今のこの平和は、過去の戦争の犠牲の上に成り立っている奇跡と言えるのではないのでしょうか。

だからこそ、私たちは過去を知り、考え、語り続けていかなければなりません。明るい未来のために一人ひとりが受け取った平和のバトンを、ともに次の世代へつないでいきましょう。



平松 とみさん(上本所)

最近30歳を迎えた孫が、家族を持ち元気に働く姿を見て「父は孫と同じ頃に亡くなったんだな」と、年月の早さをしみじみ感じています。また、長年人生を歩んできた今だからこそ、女手一つで私たちを育ててくれた母の苦労をより実感しています。これまで「つらい話」として当時のことを家族に話してきませんでしたが、父を身近に感じることができ、話せてよかったと思いました。両親のおかげで今の家族があることを知ってもらうためにも、語り続けていきたいです。



鮮魚店の前に立つとみさん(右)と姉・兄。姉兄は店を継ぎ、母と共に働きながら店を支えました。



当時高校生のとみさん(左)と、母(右)・妹(中央)。あの時母のお腹にいた妹は、この頃には中学生に成長しました。

## 手を合わせ 想いをつなぐ

話を終えたとみさんは、辰規さんと辰規さんの娘・芽依ちゃんと一緒に父・定平さんが眠るお墓を訪れました。芽依ちゃんは初めて訪れたお墓です。3人は家族が平和に暮らしていることへの感謝を伝え、手を合わせました。

